

「社会主義の下における人間の魂」をめぐって

—ワイルドの個人主義と批評主義—

伊藤 勲

(東京成徳短期大学助教授)

『意向集』の陰に隠れがちな「社会主義の下における人間の魂」は、『意向集』以上に、藝術家を作り上げる根本的なものが、社会や人生との関わりの中で展開されてゐる。個人主義を論じたこの論文が、機知だけの面白さに終始せず、根本的人生態度、批評を生み出す精神の基本的なあり方を扱つてゐることが、殊に我々の瞠目するところなのである。生活を第一に考える国民性をもつイギリス人の社会の中で、藝術の独立的価値の確立に果たしたワイルドの貢献は、ペイターと並んで実に大きなものがある。藝術や歴史などの言はぬ固定したものを対象としたペイターと、社会といふ流動的で不安定なもの言ふ社会を対象にしたワイルドとでは、自づと藝術形態も変はつてこざるをえない。社会と対峙することによつてワイルドは必然的に個人主義をペイター以上に徹底させた。批評を藝術の域に高めたのがペイターだとすれば、ワイルドは藝術を批評そのものへと推し進め、新しい文学の展開に寄与したことは特筆すべきことである。この論文に示された「自分自身になれ」といふワイルドの個人主義は、彼の批評主義の実体としてワイルド藝術に一貫する思想であるとともに、イエスの生き方を欽仰しながらも狭隘なキリスト教的普遍主義を覆すものである。

相対的で流動的な社会を相手にしたワイルドは、相対主義の泥沼に足を取られないやうにするために、感情的な相互貫入的な交感よりも、自己と対象との間に仮面といふ緩衝物としても機能する媒体を置いた。ワイルドは純粹客観としての自意識の鏡に写る自己の虚像をもうひとりの自分として独立した存在に仕立てあげた。自己から他者を生み出したのである。自己であつて自己にあらざるこの仮面を通して囚はれぬ自由な立場から社会への批評がなされた。ワイルドにとつて「自分自身になる」とは、自我を徹底的に抑制し、抑制すればするほど自意識の鏡に明確に立ち現れてくる自己を他者として客体化し、同時に自己自身に立ち返つてゐることであつたであらう。

ペイターの所謂タブラ・ラーサは感覚的事物を写す鏡であるとともに、それは自己を対象化する自意識の鏡でもあつた。ペイターの批評はさうした一種のナルシズムから生ま

れた。ナルシズムといふのは自己を客体化する自己批評であり、それがあつて初めて他の批評ができる。これがペイターの批評方法の基底をなすものである。ワイルドがペイターから引き継いだものは、このナルシズムを基盤とした批評方法である。対象が「《自分》にとつて何であるか」といふペイターの絶えざる自己への問ひかけは、ワイルドに至つて、我欲や偶然的なものをすべて捨てることによつて「自分自身になれ」といふ明確な個人主義の宣言となつた。自己から他者を生み出さうとするこの個人主義なくして、ワイルドの批評も藝術も成り立ちえない。ワイルドは「社会主義の下における人間の魂」において、彼の藝術形態のもとを成すこのナルシズムを論じてゐるのだと言つてよい。

他者としての自己を生み出し、また社会とは相対的な関係で切り結んでゐるワイルドの個人主義から、逆説の批評が導き出されてきたが、ワイルド藝術が社会との絶えざる緊張感と不安を内包してゐるのは、逆説の批評の必然的帰結である。不安が生活や藝術の本質の様態となる。ワイルドの個人主義は社会との緊張関係の中で、否、それを条件として自分自身になるといふ意識を鋭化しようとするものである。

ところでワイルドの逆説的な警句は、人生の鋭い洞察から生み出されてゐることは言ふまでもないことだが、逆説自体は一種の理智の遊びであり、観念的になりやすい。このことは現実に対する執着が強く現実生活の利害にさといイギリス人の現実的精神とは相容れない。しかしワイルドは「社会主義の下における人間の魂」ではイエスの生き方を見本として個人主義を展開し、その語り口には単なる観念や気取りを越えた何か切実なものを感じさせる。ワイルドの生活者としての内省と真摯な態度がほの見えてくるのである。生きるといふことに直に接したところから、ワイルドは個人主義を論じてゐる。更にこれがカント、シラーによつて初めて学として確立された美学と繋がっていくところに、ただならぬ奥行の深さが窺はれる。

カントは「汝自身を汝自身によつて規定せよ」と、自己規定の理念を美に結びつけたが、「自分自身になれ」といふワイルドの個人主義の原理は、この自己規定に通じるものである。ワイルドの個人主義は自己規定的であると同時に、それによつて規定された状態を言ふ。それは内側から規定された限界である。これがワイルドにとつて外的規制を免れた自由といふものである。ワイルドは自然にふたつの力を認める。即ちすべてを一様に統括する力と、いまひとつは個別の事物の本質的個性を分化形成する力である。ワイルドが必要としたのは、後者のものそれ自身を自律的に生かしてゐる本質的個性であり、これこそ彼にとつての自然であつた。本能といふ自然を己の魂が支配することによつて、そこに必然性、自律性を具へた別様の自然を生み出さねばならない。それが内面的自己規制としての様式である。自然とは様式のことであり、外力としての自然に吞まれて自然が失はれた時代に、自然から自然を生み返すことが、ワイルドの求めた個人主義である。

ワイルドにとつてこの様式の確立は、真理も単なる可能性でしかない相対主義の時代に

は、自意識の鏡に写つた己を觀照することによつて初めてなしうることであつた。藝術それ自体が批評となるまでに自己批評を尖鋭化したこの批評主義こそナルシズムから生まれたワイルドの個人主義である。自意識の藝術はペイターが用意してワイルドが発展させたが、彼は理智の強化と感情の抑制とによつて形態を簡素化し、精神の流れを円滑にし、幻影ではなく意匠の藝術を生んだ。自己の本質にあらざるものを一切殺ぎ落とすことによつて自由を獲得しようとしたワイルドのニューヘレニズムがそこにある。

